

〔第3種郵便物認可〕

エソタ



新しい生活様式で、落語家の出演料もキャッシュレス化が進んでいる。本来、噺家の出演料は、当日現金払いで新札で渡すのが主流だったが、濃厚接触を避けるため、振り込みが増えている。そもそもなぜ現金を新札にしていたかと言つと、それが出演者への礼儀だからだ。落語家は職人気質な人が多く、「気に入らない仕事は引き受けない」可能性が高い。もちろん商売なのでお金は発生するが、噺家は「お金ではなく、あくまで依頼者の気持ちに心えて気持ちで仕事に行く」という左甚五郎みたいな気質を持っている。

笑福亭 たま

だから落語家と同業者に共演を頼む場合、一番大事なことは「相手に敬意を払う(気持ちよく仕事をしてもらう)」ことである。そのため「本来、貴方にはもっと高額なギャラをお渡ししなければならぬのですが、私の精いっぱい金額がこれなので、せめて新札に致しました」という誠意を表現しているのだ。

絵画の場合、同時代の人が評価しなかったが、後世の人が評価して作品や作家が有名になることはあるが、落語にはそれはない。ライブ芸はその場で消えていくので、多くの落語家は、ほぼ無名のままこの世を去る。しかし特定のファンから絶賛されることも多い。ある意味、落語家はほとんど全員が「売れてないゴ

敬意見せる機会減る



ギャラ袋を持つ筆者

見える化」になる。「集合時間に先輩より早く先輩は到着しておく」とか「電話は先輩が切るまで待つ」とかの礼儀も「敬意の見える化」かもしれない。

ツホ」状態である。

後世でも大衆から評価されることはないが、観る人からすれば高評価されるべきゴツホみたいな人がたくさんいる。噺家はお互いを「世界的芸術家」同士として扱つことで平静を保っている。たとえ世間が認めていなくても：(笑)。だからこそ、噺家同士の出演料は基本は交渉せず、あくまで「依頼者は相手に精いっぱい値段を出すだろつ」という性善説に立つので、新札かどうか「敬意の

しかし、オンライン会議だと、先輩がネット上で会議室を開いた後にしか先輩が入れなかったりするのでも、どんどん礼儀を見せられる状況が減っている。先輩からすれば「面倒くさくない」とも言えるが、礼儀の積み重ねで信用を得る機会が著しく減る。そうなるとう一回の失敗で信用を失うリスクが高くなる。このコロナ禍は落語界の礼儀と生活様式を大きく変えそつである。

(落語家「次回掲載は八月六日」)